

# 花の香り（春-5）

中村祥二 会長

## ティ・ローズの名品

### レディヒリンドン (Lady Hillingdon)

バラとランは長く香りの審査員をしていたので香りの良い珍しい花に出会う機会に恵まれる。私たちの身の回りに咲く四季咲きの現代バラに重要な役割を果たしたティ・ローズは中国のコウシンバラの流れをくむ系統である。ティ・ローズは19世紀に作出されたものが多い。ティ・ローズの「茶」の名前を最も良く表しているのはレディヒリンドンである。紅茶の香りの特徴を感じるソフトで親しみやすい香りがする。中国由来のロサ・ギガンテアやチャイナ系の香り特徴成分を含有する。香り立ちは中程度であるが、上品で優雅な印象を与える。

バラには優れた香りを持つものは多い。バラとの長い付き合いの中でも私は‘レディヒリンドン’が特に好きだ。イギリスで1910年に作出された。つるバラは1917年であった。交配親は‘Papa Gontier’と‘Mme Hoste’である。レディヒリンドンの名はインドの或る太守の妃の名前で、著名な女性であった。古い品種だが、現在でも人氣が高く、少し大きいバラ園なら何処でも見かける。優雅である。清楚で親しみ易くすがすがしい。甘さもそれほど強くなく慎ましい。

ミスターローズといわれ、数々の芳香バラの作出を手がけられた鈴木省三先生もこのバラに賛辞を惜しまない。「中央の小さい弁は清純な感じで『宵待草』の歌曲を思わせる。花色は弁先が白ぼかしの杏黄色

で、しっとりとした落ち着きがある。……典型的なティ・ローズの芳香がある。……現在のハイブリッド・ティには花色の杏黄色や、芳香でこの花をしのぐものは少ない。……高く伸びた枝条から杏黄色の花が下向きにややたれて咲く情緒は美しく、今も一部の人々に愛好されている。枝変わりできた本種のつるバラは苗木がつるにならず、木ばらになってしまうことがあるため、栽培は普及していないが、ポール仕立てに伸びたものは最高のつるバラと思える。」（鈴木省三『ばら・花図譜』小学館、1990）日比谷の日本プレスセンターで開かれた『ばら・花図譜』の出版記念パーティには私も出席した。



写真提供 谷澤恵津子氏

野村和子バラ文化研究所副理事長と御巫由紀千葉県立中央博物館主任上席研究員と同席のとき、日本ではティ・ローズの中でレディヒリンドンの香り評価が一番だった、と伺ったことがある。

京成バラ園の近くに泊まって、朝からレディヒリンドンの開花を待ちながら香りを嗅いだ。そうすると5分から7分咲きの頃からの香りが最も良かった。

国際新花コンクールの審査に行った調布市の神代植物公園のばら園には3箇所、このレディヒリンドンの株があった。朝露がまだ残っている花びらに顔をちかづけると、紛れもなく「茶」の香りを感じる。紅茶のダージリン・セカンドフラッシュを缶からさらさらと出して、缶の中を嗅いだ時とそっくりな香りがする。ティ・ローズの名前の由来を実感した。日が昇り気温が高くなると茶の香りの特徴が弱まり、香り全体のバランスが崩れてくる。昼なら木陰の‘レディヒリンドン’を選ぶのがよい。この特徴的な香りは1,3-ジメトキシ-5-メチルベンゼンによるところが大きい。

資生堂リサーチセンターの研究によるとこの香気成分は脳波の一種であるCNV（随伴性陰性変動）によって鎮静効果が、またテープストリッピング法で荒らした皮膚のバリア機能を回復させる肌荒れの改善効果が認められている。

国際香りと文化の会会員の谷澤恵津子さんから、九品仏駅近くの自宅のレディヒリンドンを見に来ないかと誘われた。樹齢80年近いレディヒリンドンは花の盛りには一株で数百以上の花を咲かせるということだったが、2013年5月に改めて数えなおしたところ1200花までは数えられたという。御夫君の祖父である谷澤信雄氏が自宅の庭に植えたバラで、戦前に植え、生きながらえた貴重なバラの中にこのレディヒリンドンもあったのだ。谷澤氏は日本ばら会理事長を15年間勤めた方でもある。

越後丘陵公園と神代植物公園でバラの香り審査員と一緒に勤めた市川祐司さんを誘って伺うことにした。満開の花が一番多い良い時期のしかも午前を訪れて見事な花と香りを楽しめたのはとても幸せだった。



#### 参考文献

1. Peter Beales, *Classic Roses*, New York, Holt Rinehart and Winston, 1987
2. Roger Phillips & Martyn Rix, *The Ultimate Guide to Roses*, London, Macmillan, 2004